

列車は進み、広島原爆の物凄さも車窓より見る。五月二日妻の実家の栃木県に帰る。出征時の幼児も五歳の腕白坊主になっていたが、私の顔を見て不思議そうな顔をしている。「父ちゃんだよ」恥ずかしそうにしながら近づき抱きついた。

西宮にも行って見ました。一面の焼け野原にバラックが少し建っていた。眼が少し赤くなって痛むので眼科医見て貰うと「マラリアから来ている」と手当をして呉れた。右眼は良くなったが左眼は二度と光を見ることが出来ず現在にいたっています。私は不戦を誓い、心から戦没英霊の御冥福をお祈り申し上げます。合掌

支那事変では北支で戦闘

—戦争末期は内地飛行場大隊—

岩手県 伊藤 藤 徳 二

私は大正五年十二月十五日生れ、旧姓は細川と申しますが、昭和十二年徴集兵で、第一補充兵として、十

三年三月八日、弘前の歩兵第三十一連隊留守隊に入隊したのです。十月末まで教育を受け、一期の検閲は受けて、十一年式の軽機関銃班でした。

昭和十四年二月、第三十六師団、歩兵第二二二連隊が新設されました。私は現役兵ではなかったし、そう申しては何ですが真面目にやりましたので、班長にも信頼され、古参兵にも余り叩かれず、二月に一選抜で上等兵に進級することが出来ました。

四月北支へと、神戸港から出発、大沽へ上陸しましたが、連隊長は青砥大佐で、連隊本部は山西省の大原の南方の平遥という所にありました。私は第二大隊の第六中隊に配属され、最初の陣地は五條鎮という所でした、分哨勤務や討伐が任務でしたが、主な敵は共産八路军で、夜襲して来たのを撃退したり、逆にこちらが討伐作戦に出たりしました。

八路军はこちらの兵力が少なく弱いと攻めて来る。我が軍が強いと逃げるといふ戦法でした。山の上に敵がいて、「連隊はそれを占領せよ」という命令を受け、第二大隊は五條鎮から山西省南部の潞安へと南下した

のです。

私は当初、天津の時第三小隊で小野見習士官（水沢出身）が小隊長でした。第一分隊長は体重八十キロぐらいで、行軍が苦手の軍曹でしたので、戦闘の時は、上等兵の私が分隊長代理をしていましたが、私も当時七十キロを越していました。

第三小隊は何時も中隊長のそばにいたが、古さん荘という村で戦闘があった。第二大隊は戦闘のため道路を行進中、山頂の敵からチェコ式軽機関銃を射って来ました。「第六中隊あの山を占領せよ」と命ぜられました。薄暮攻撃のため、帯剣等に防音装置をし、中央第三小隊、左第一、右第二小隊と展開し、山を占領すべく前進した。中隊長は戦闘前、皇居選擇をして山を登って行き、後二百メートルぐらいの所でチェコ機銃で猛射され「止まれ」と号令をしました。

その時兵隊がやられた。隊長は山頂占領のため「第三小隊軽機射て」と命ぜられ、私が射撃の号令をかけたら、八路軍は軽機関銃発射の光を目当てて射って来た。初年兵の千葉射手が「やられた、天皇陛下万歳」

と叫んだら中隊長は「馬鹿野郎、天皇陛下万歳ととなえて死んだ奴はいない、大丈夫だ」と大声で励ました。八路軍は射撃だけでなく、手榴弾（柄付きの）を投げて来た。山を占領し突撃するため射撃を止め、シューといって登って「ヤッ」と突っ込んだら敵は降りて逃げ、今度は向かい側の山から射ってきた（夜間は突撃は「ワー」という喚声はあげず、ほとんど無言で突っ込んだが、自然に「シュー」「ヤッ」という低い、短い声を出してしまうことが多かったようだ）。

第六中隊は続いてその山を占領し、一段落というところで、その敵の陣地で夜を明らかにした。第五中隊の人々が飯盒へ飯を詰めて持ってきてくれて急に空腹を感じたことを記憶しています。敵は要点の山には壕を掘ってあり、その壕を逆に利用して我々は敵と対峙していた。

次の山にも八路軍は陣地構築をしていたが、この山を占領したので我々の任務は完了したわけであり、占領しても、占領しても敵は次の陣地を構築してあるので、共産八路軍との戦闘は止まることのない戦闘で

ありました。この戦闘で、中央の第三小隊の損傷は多かったが、両翼の第一、第二小隊は損傷は少なかったのです。

この戦闘、討伐はほんの一例に過ぎませんが、その他数々の戦闘をしました。相手は蒋介石軍は少なく、ほとんどが毛沢東の共産八路军でした。八路军は手強く、また戦闘馴れして上手だった。日本軍と真面目な戦闘をすれば犠牲が大きいことは知っているので、先にも申したとおり、強ければ退く、弱い、小敵だと見れば襲撃する。追えば逃げる、退けば追尾する。情報網はあちこちに張りめぐらしていて、住民を脅かしたり、手なづけたりで、一口に言えば始末の悪い敵でした。

私が三か月ぐらい司令部にいた時、明治作戦（明治節の名をとり）という十一月三日の戦闘があった。私の同年兵の被害は少なかったが、我が第六中隊では相当の犠牲者を出した。第一小隊長は戦死、兵隊も三人戦死し、負傷も相当数出た。若し私が、司令部に行かず中隊に残っていたら、分隊長代理だったので死ん

でいたかも知れない。また昭和十五年の論功行賞では、下士官としての勲功が認められ、金鷄勲章に次ぐ勲七等青色桐葉章を戴いた。これも運が良かったわけです。

昭和十五年七月、内地で教育された交替要員の初年兵が来た。我々昭和十二年徴集兵に対し中隊から三十名ぐらい（全部補充兵）の帰還命令が濫安で出た。昭和十三年三月から十五年七月まで約二年半の軍務を終え、内地上陸、広島で検疫を受け、弘前の原隊へ帰り、七月末、召集解除になりました。

再召集が来たのは、いよいよ戦況も厳しくなり、本土決戦が叫ばれはじめた昭和十九年八月でした。弘前の留守隊に入ったが、弘前から五十人ぐらいが千葉県柏の大井部隊という飛行場大隊に転属になった。五十名の中には現役兵も混ざっていたが、岩手県等東北各部隊の集まりでした。

続いて、群馬県の太田では中島飛行機、海軍の飛行場もあった。太田、藪塚、前橋などの飛行場大隊での地上勤務の連続でした。

二十年になると米軍の空襲が段々とひどくなって来

たが、小泉、太田では中島飛行機工場が狙われた。B29が編隊で来た。私たちは「自分達が射つてもいいと判断した時は射て」と命ぜられていたので、高射機関銃を射っていてB29が落ちて来た時もあった。グラマン（米の海軍機）は兵舎を狙って来て、機関砲でボツ、ボツと穴を空けられたが、私等は陣地にて助かった。その後、前橋飛行場で、眼下の前橋の市街は火の海となり、本当に気の毒でした。戦争末期になると、非戦闘員、一般住民のいる市街地、大都市から中都市、小都市まで狙うようになった。従って前橋の時、街は焼け野原になった。飛行場では屋根を機関砲で貫通されたが、被害は僅少でした。中島飛行機の太田、小泉の飛行機工場や、前橋は爆弾というより、主として焼夷弾攻撃でした。

終戦のラジオは聞かなかったが、隊長から終戦を聞かされました。飛行場大隊の私の隊は五十人ぐらいで、整備・防空の地上勤務だったが、燃料は補給中隊が林の中に壕を掘ってドラム缶詰で相当入れてあったのです。

八月十五日、終戦で、マッカーサーはポツダム宣言で兵を帰すというが、全部を帰還さすわけにはいかぬだろう。それで後継ぎを先に帰すということになった。十七日、私は「家に帰れ」という命令を受けた。衣料一式、毛布・天幕・上衣・下着・米二升を持って、大宮で乗り換え、貨車で一晩かかって家に帰ることが出来た。

聞くところによると、マッカーサーが上陸するので、航空隊が攻撃するという危険があるという情報もあり、内地、特に関東周辺の航空関係部隊は、「速やかに帰郷させよ」という方針であったという。そんな関係からか飛行場大隊の我々も、復員が一番早かったということのようでした。